

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284130

研究課題名(和文) EU統合下における周辺農山村の人口変動とルーラル・ジェントリフィケーションの進展

研究課題名(英文) Population Changes and Rural Gentrification in european rural areas under the Integration of EU

研究代表者

山本 充 (Yamamoto, Mitsuru)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：60230588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,200,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーロッパの周辺農山村の一つであるアルプス・チロル地方においては、近年、季節的な長期滞在者が増え、かつ、チロル域外からも含めた移住による定住者も増加する傾向にある。来訪者は、多様なアクティビティを行い、彼らの行動範囲も広域化する傾向にあった。来訪者の増加は、滞在の拠点である集落における商業・サービス機能の集積を助長し、観光行動の多様化は、観光集落が提供する機能の多様化と軌を一にしている。こうした変化に伴って、集落の景観の質的な向上がみられたが、一方で、景観の均質化も進行していた。

研究成果の概要(英文)：In Tyrol, Austria, one of peripheral areas in Europe, not only seasonal long-stay visitors but also immigrants from foreign nations tends to increase recently. Their activities have been diversified, and the territories of their activities have been enlarged. The increase of visitors has promoted the concentration of commercial and service functions to small centers in Tyrol, and the diversification of activities have been based on the functional diversification of small centers. With those changes in small centers, the landscape of small centers have been gentrified and also standardized.

研究分野：人文地理学

キーワード：農村 人口 EU ルーラル・ジェントリフィケーション アルプス

### 1. 研究開始当初の背景

EU 統合の拡大・深化は、域内における人口移動を活性化させ、また変化させてきた。とりわけ、労働力移動が自由化される中で、経済的に脆弱な周辺国・地域から、ブルーバナナと呼ばれるヨーロッパの中心軸への移動が顕著にみられ、その動向を把握することが行われてきている。ヨーロッパ経済の中心における人口流入を伴う経済成長は、大都市圏の拡大をもたらし、郊外への人口移動、さらには、郊外を越えた農村地域への人口移動が生じた。フランスでは、都市から郊外へ、そしてより離れた農村への移動が報告され、ドイツにおいても、農村における居住が進展していることが明らかになっている。EU 域内における人口流動は、EU 全体において、また、加盟国内において、そして個々の地域毎に、活発化し、かつ多様な様態で生じており、こうした流動が個々の地域の経済、社会など様々な側面に影響を与えていると考えられる。

人口移動における新たな傾向として、大都市圏から離れた周辺農山村地域において、人口の流入がみられるようになった。従来、一般的であった農村から都市への移動とは逆の移動から、逆流的人口移動として、また、雇用機会の確保とは異なり、非経済的な理由、農山村における景観やレクリエーション活動などアメニティを求めての移動として、すなわち「アメニティ・マイグレーション」として把握する試みが始まっている。すべての周辺農山村において人口流入が生じているわけではなく、自然条件や農村景観、低次中心地へのアクセシビリティなど、どのような地域特性にある周辺農山村において、アメニティ・マイグレーションが生じているのか、流入者は、年齢、社会階層など、どのような属性を有し、どこからどのような理由で移住してくるのか、解明されなくてはならない。

さらに、こうした人口流入に伴う農村の質的变化を、「ルーラル・ジェントリフィケーション」として把握し始められている。ルーラル・ジェントリフィケーションとは元来、田園生活を希求して都市から農村へ中産階級が移住することで、社会環境や自然環境に大きな変化が、とりわけその質的向上がもたらされることを指す概念である。彼らの購買力の高さや要求水準の高さが、彼らの住宅地とその周辺環境の美化をもたすだけではなく、行政サービスの向上や高水準の商業サービス機能の立地も可能とし、農村環境の維持に繋がることとなる。また、ルーラル・ジェントリフィケーションは、単に農村の社会面や自然環境面にとどまらず、行政や商業、農村景観の質的变化までも含み、農村の質的变化を包括的・総合的に示す概念として捉えることができる。従って、周辺農山村におけるルーラル・ジェントリフィケーションの動向を把握することは、地理学的手法を有効に用いることができるばかりでなく、周辺農

山村の持続性を考えていく上で、極めて重要であると思われる。

### 2. 研究の目的

都市から農山村への来訪は、観光であれ移住であれ、いずれも農山村の景観・環境や文化、そこでの活動に惹かれて行われる側面があり、短期の訪問から季節的な滞在、そして定住に至るまで多種多様な形態をもつ。農山村において、どのような属性による来訪がどのような時期や期間をもって行われ、それぞれがどのような活動を行っているのか、加えて、彼らの存在と活動が、農山村の景観・環境や経済・社会などにどのような影響を与えているのか、とりわけ周辺農山村の維持・活性化にとって重要な課題となる。農山村への影響の大きさを鑑みると、来訪の中でも、別荘などにおける季節的な長期滞在 residential tourism や、農山村という場とそこでの活動に惹かれての移住 amenity migration が注目されるべきである。また、農山村の維持・活性化を図るという意味で、来訪者によって農山村の質的向上 rural gentrification が生じているのか留意する必要がある。

本研究では、EU における多様で活発な人口流動の中において、周辺農山村へ、どのような属性の人々がどこから、どのような理由で移動しているのか、アメニティ・マイグレーションとしてその特性を把握する。そして、こうした流入による周辺農山村の人口の質的变化により、農村景観や非農業的機能の立地、農村行政にどのような良好な変化がもたらされているのか、さらにはこれら諸変化がどのように相互に関連しているのか、換言すれば、ルーラル・ジェントリフィケーションがどのように展開しているのか、明らかにする。

### 3. 研究の方法

EU における周辺農山村として、人口流入が生じているオーストリア・チロル州を取り上げ、ルーラル・ジェントリフィケーションの進展状況、すなわち、人口変動とそれに伴う農村景観の変化、非農業的機能の立地、政治・行政上の変化を、統計資料および現地観察によって把握する。さらに、事例集落を抽出し、ミクロレベルで、ルーラル・ジェントリフィケーションの展開プロセスを把握する。以上から、周辺農山村の持続性におけるルーラル・ジェントリフィケーションの特質と意義を考察する。

### 4. 研究成果

#### (1) オーストリア・チロル州における人口動態

オーストリア・チロル地方の人口動態を検討すると、19 世紀後半以降、人口が一貫して増加し続けていること、出生と死亡の差である自然増加については常にプラスであり、転入と転出の差である純移動(社会増加)についても 1950 年代以外は一貫してプラスの値を示してきたことがわかった。

チロル地方の人口変化をコーホート変化率からみると、10～14歳 20～24歳への変化は1951 1961年のみが転出超過、1961 1971年以降はつねに1を上回り、同時に20～24歳 30～34歳の変化は1をわずかに下回ることが多く、チロル地方は若年層を引き付ける地域であったことが読み取れる。2001 2011年は20～24歳 30～34歳でも1を大きく上回り、20世紀とは移動の傾向が変化したことを示唆している。1950年代は若者を他地域へ送り出す周辺地域的な人口移動の特徴を持っていたが、1960年代以降は若者を引き付ける地域となり、2001年以降はその傾向がさらに強まっていると言える。オーストリアでこのような人口移動の特徴を持つ地域はウィーン、チロル州、フォアアルベルク州のみであり、首都ウィーンとアルプス地域が若年層を引き付ける魅力をもつことが確認できる。

一方、オーストリアの国内人口データ、オーストリア国籍人口の移動データによると、チロル地方は転出超過の傾向を示している。とりわけ首都ウィーンに対しての転出超過が大きい。オーストリアの国内人口移動の動向は20歳代の若者を中心とするウィーンへの人口集中、小さい子どもを持つ世帯のウィーン通勤圏の隣接州への流出で特徴づけられ、チロル地方はウィーンへの若年人口の供給地域となっている。オーストリア国籍人口の国際移動をみると、転入を転出が上回り、とくにドイツに対して大きな転出超過を示している。この傾向はチロル地方でも同様である。ウィーンを中心とするオーストリア国内でのチロル地方の位置づけは周辺地域ということになり前述とは異なる結果となった。

オーストリアの周辺地域であるチロル地方が長期間にわたり人口増加を続けてきた要因を、国際人口移動に求めることができる。1960年代以降、国内の労働力不足を補うために「外国人労働者」がオーストリアにも導入され、そうした「労働者」は首都ウィーンだけでなく、スキーリゾートとして発展がはじまっていたアルプス地域でも多く受け入れられていたと考えられる。さらに、1990年代以降は旧社会主義諸国（旧東ドイツ、ハンガリー等）の人々が就業機会を求めて流入している。

オーストリア人のみでみると、国内の周辺地域として、教育機会や就業機会を求めて若年層はウィーンへ、あるいはドイツ等の国外へと移動し、転出超過の傾向を示すが、それを補うように外国人がチロル地方に流入することで、長期間にわたり、人口が維持されてきたことが統計から読み取れる。すなわち、ヨーロッパスケールでみたとき、ヨーロッパの中心地域とみることができる。「ブルーバナナ」に含まれるチロル地方はヨーロッパの経済発展に応じて、国際的なツーリズムの目的地としての雇用を増大させ、それにオ

ーストリア人よりもむしろ外国人が反応して来住し、結果として人口維持を支えてきたと理解することができる。なお、2000年以降はチロル地方の外国人の国籍構成が大きく変化し、それまでもっとも多かったトルコおよび旧ユーゴスラビア諸国からの外国人が減少し、代わりドイツ人が急増、2011年にはドイツ人がチロル地方で最大の外国人勢力となっている。州都インスブルックはドイツの大都市ミュンヘンから自動車ですぐ1時間程度の距離にあり、これまでドイツからは多くの観光客を受け入れていた。近年はドイツ人の行動にツーリズムから定住への変化が観察され、それが外国人統計の変化に反映されている可能性がある。

(2)チロル州における来訪者の増大と行動の多様化・広域化

チロル地方においては、観光客数、宿泊数ともに伸びてはいるが、個々の滞在期間は短くなっている。また、観光客数は夏と冬にピークを迎え、季節による変動も大きい。一方で、別荘が増加し季節的な長期滞在者が増え、かつ、チロル域外からも含めた移住による定住者も増加する傾向にある。チロルにおける主要な野外活動として、夏季の登山・ハイキング、冬季のスキーが挙げられる。近年、これらに加えて、オフロード・バイクやラフティングなどの山川における多様なスポーツが盛んとなっている。また、近隣観光スポットへの小旅行に加えて、遠隔地へのツアーも連日のように提供され、その行き先が多様でかつ広域化する傾向にある。

滞在集落内においても、コンサートやダンスなど屋内におけるイベントが開催され、また、スポーツ用品店や装飾品店をはじめとして商店の立地も進み、都市部に遜色ないショッピングを楽しむこともできる。加えて、宿泊施設や別荘の新築、改築が進展し、快適で豪華な内装・設備を持つものが増えている。ホテルだけではなくペンションにおいても、サウナやフィットネスルームが備えられ、より質の高い食事の提供にも気が配られている。

以上のように、来訪者は、その宿泊施設内における健康増進活動、集落における文化活動、そして周囲の山地における多様なスポーツ、そこを超えた小旅行と、ひとところに居ながらにして、多様な活動を行っている。

来訪者行動の多様化は、その行動範囲の拡大を伴う。多様な山岳スポーツの興隆は、利用があまりされてこなかった領域の利用を開拓した。加えて、ゴンドラがリフトに代替されることで、山地へのアクセスが容易となり、これまで以上の利用につながった。すなわち、活動の範囲が広がっただけでなく、より多くの来訪者、そして高齢者を含むより幅広い層が訪れることができるようになることで、利用の強度も高まったといえる。さらに、自家用車の利用に加えて、旅行会社による小旅行のプログラムが多様になり、かつ

遠隔地化することでも行動範囲は拡大している。来訪者はもはや滞在地に留まるだけではなく、アルプス中を回り、時にはアルプスの外へと足を延ばしている。そして、チロル各地の集落において、滞在者が同様の小旅行を自ら行い、かつ、同様の小旅行が企画され提供されることで、それぞれの集落に滞在する来訪者の行動範囲は相互に重なり合い類似のものとなる。

### (3)人口流入に伴う山間地集落の景観変化

来訪者の増加は、滞在の拠点である集落における商業・サービス機能の集積を助長することとなる。そして、観光行動の多様化は、観光集落が提供する機能の多様化と軌を一にし、滞在の長期化は、商業・サービス活動の安定もまたもたらすといえる。

こうした集落では、建物の更新と機能改善が進むが、そうした中で建物の形状的な側面としての集落景観が徐々に変化する。オーストリア・チロル地方の山間地に位置し、小規模な基礎自治体の中心集落であるマイヤーホーフェンを事例に、集落景観の地域特性を、建物の外観に基づいて識別した類型（以下、建物タイプ）から明らかにした。

事例地区では多くの建物の外観に共通する特徴として「切妻」「ペランダ」「木製壁」が確認され、その有無に基づいて、典型的な組み合わせから建物タイプを設定した。建物タイプは、伝統的な外観を有する代表的類型の「タイプ1」、派生型である「タイプ2」、一定の伝統性を保持しつつ、特定の利用形態に特化する「タイプ3」、建築コスト低減や特定用途が指向される「タイプ4」、多様な建築類型を含む「タイプ5」に分類できる。「タイプ1」が最大グループであり、次いで「タイプ5」が全体の5分の1を占め、さらに代表類型と類似する「タイプ2」と続くが、「タイプ4」「タイプ3」は少数にとどまる。建物の階数では、4階までの建物が全体の9割を占めており、集落全体として統一のとれたスカイラインとなっている。

建物タイプの地域的な特徴を検討するため、集落の社会的中心地である役場の建物、および経済的基盤となる観光業の中心地の一つであるロープウェイの駅をそれぞれ起点とした半径500メートルのバッファ（同心円の範囲）を設定した。これらを用いて中心集落を、行政施設の集まる北部中心の「A域」、商業・金融機関の集まる南部中心の「B域」、レジャー施設の立地する「C域」、さらに周辺部となる「他区域」に区分した。これらから空間的な分布をみると、代表的類型である「タイプ1」は集落内全体に分散的に分布するが、ツーリズム活動の中心の「C域」や周辺部「他区域」において割合が高い。「タイプ1」に該当する宿泊施設は多く、当地において「タイプ1」は宿泊施設として積極的に採用されている。一方、北部中心である「A域」や南部中心の「B域」では他のタイプの割合が若干高くなっている。とくに多様な建物

形状を含む「タイプ5」は、商業やレジャーの集まる「A域」から「C域」までのメインストリート沿いに集中しており、建物の有効活用が求められる狭小な敷地や、周辺部での宿泊施設などにおいて選択される傾向にある。

建築統計によると、宿泊施設が増加している。既述の通り宿泊施設では伝統的な建物類型が選択される傾向にあり、これらが増加することで、当地において「チロルらしさ」のイメージが維持・強化がされている。建物統計によると、ホテルの件数は2001年に178件であったが、2011年には206件と10年間で15.7%増加している。現地調査を通じて、これらの新しい建物では施設などの機能の近代化や大規模化を確認でき、建物の外観は伝統的な様式であるものの大規模かつ近代的な宿泊施設が当地で増加している。一方、住宅においても新築や改築を通して建物の近代化と改善が進展しており、既存建築物でも屋根、窓、集中暖房、外壁の改修が行われ、外見上や機能的な改善が図られている。また、住宅の大規模化と建物の集合住宅（多世帯）化が進展し、集合住宅を含めた大規模な建物が増加傾向にある。こうした建物の近代化は、伝統的な建物類型以外の建築様式の増加の背景となっている。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Yamamoto, Mitsuru 2017. The Progress of Population Inflow and Rural Gentrification in Karuizawa on the Outskirts of the Tokyo Metropolitan Area. 専修大学人文科学研究所月報 285: 19-29. (査読無)

飯嶋曜子 2017. オーストリア・チロル州における空間整備と持続可能な観光開発(1). 明治大学教養論集 524:71-87. (査読無)

中川聡史 2016. 人口移動は地域格差を是正させたのか. 地理 61:38-45. (査読無)

伊藤徹哉 2016. オーストリア・チロル地方の山間地における建物タイプからみた集落景観の地域特性 - マイヤーホーフェンの事例 -. 地球環境研究 18:71-87. (査読有)

山本 充 2014. 中央ヨーロッパにおける市場経済化の進展に伴う都市システムの変容. 専修大学人文科学研究所月報 270: 67-82. (査読無)

〔学会発表〕(計6件)

Yamamoto, Mitsuru Migration to Rural Area and its Influence on Rural Community in Central Highland, Japan. 24th Colloquium of the Commission on the Sustainability of Rural Systems. 2016年7月8日, Liege大学(ベルギー).

飯嶋曜子 オーストリア・チロル州における空間整備と持続可能な観光開発. 日本地理学会 2016年度春季学術大会. 2016年3月22日, 早稲田大学(東京都).

山本 充 オーストリア・チロル州における観光の進展に伴うプルリアクティビティ

の変容. 日本地理学会 2016 年度春季学術大会. 2016 年 3 月 22 日, 早稲田大学 (東京都).

中川聡史 オーストリア・チロル州における人口動態. 日本地理学会 2016 年度春季学術大会. 2016 年 3 月 22 日, 早稲田大学 (東京都).

伊藤徹哉 オーストリア・チロル地方の山間地における建物タイプからみた集落景観の地域特性. 日本地理学会 2016 年度春季学術大会. 2016 年 3 月 22 日, 早稲田大学 (東京都).

山本 充・中川聡史・飯嶋曜子・伊藤徹哉 アルプス・チロル地方における来訪者行動の多様化と山間拠点集落の機能強化. 日本地理学会 2015 年度春季学術大会. 2015 年 3 月 29 日, 日本大学 (東京都).

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 充 (YAMAMOTO MITSURU)

専修大学・文学部・教授

研究者番号: 60230588

##### (2) 研究分担者

中川 聡史 (NAKAGAWA SATOSHI)

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号: 10314460

伊藤 徹哉 (ITOU TETSUYA)

立正大学・地球環境科学部・教授

研究者番号: 20408991

飯嶋 曜子 (IIJIMA YOKO)

明治大学・政治経済学部・准教授

研究者番号: 20453433